慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	党、紅軍、農民(二・完) : 閩西根拠地、一九二九年～一九三四年
Sub Title	The party, the red army, and peasants: The minxi base area, 1929-1934 (2. end)
Author	高橋, 伸夫(Takahashi, Nobuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.11 (2004. 11) ,p.39- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20041128-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

党、紅軍、農民（二・完）

――閩西根拠地、一九二九年～一九三四年――

高橋伸夫

序　論
第一章　閩西根拠地の概要
第二章　党組織
（1）党員の補充
（2）党内交通
（3）党員の価値と行動様式
……（以上七七号一二号）
第三章　紅軍への動員
（1）農民と幹部――紅軍への加入をめぐって
（2）逃亡兵たち
（3）地方武装と農民
（4）土地改革は動員の梃子となったか
（5）モデル地区――上杭県才溪郷
結論にかえて――党権力と農民
……（以上本号）

第三章　紅軍への動員

次に、われわれは動員の主体から、動員の主体と客体の相互作用に目を転じようと思う。ここで焦点を当てるのは、党による紅軍への動員である。「すべてを犠牲にして戦争の勝利の獲得に備え、すべての工作を戦争に従属させなければならない」[1]という言葉に象徴されるように、この時期の動員は、党それ自体の生存をかけた大掛かりなキャンペーンとして展開された。したがって、われわれが共産党の動員能力を見極めるには格好の材料となるのである。とりわけ、紅軍の拡大は革命根拠地の直面する最も切迫した任務として提起された。ソビエト中央局の表現を借りれば、「これは革命戦争への参加と紅軍の強化という課題に対するわが党の積極性と動員力を測定する物差しである」[2]。兵員の増強は、閩西ソビエトが誕生してから、一貫して掲げられてきた目標であったが、一九三一年春以降、具体的な拡大目標を各県に示したうえでの猛烈な拡大キャンペーンが開始された。

（1）農民と幹部――紅軍への加入をめぐって

多くの資料が示すところ、農民は紅軍への加入に及び腰だった。彼らはあらゆる手段を尽くして、兵士となることを避けようとした。例えば、仮病を使ったり、身代わりとして子供や老人や身体障害者や病人を送ったり、他の地域へ逃げたりした。いくつかの報告によれば、南洋に逃れた農民も少なからずいたのである[3]。閩西の状況について、党中央に送られたある報告書によれば、「紅軍を拡大するぞというたびに、大衆は大いに恐慌をきたす」のであった[4]。妻たちの多くは、夫たちが紅軍に加入することを、いまや根拠地で認められた離婚をちらつかせながら引き止めようとした。夫たちが不幸にして動員され、前線に送られた場合でも、妻たちは、彼らにさかんに手紙を書いて、早く村に戻るように求めたのであった[5]。

こうした農民の消極的姿勢に直面して、党とソビエトの幹部たちも、あらゆる手段を用いて、彼らを紅軍に動員しようと試みた。その際、頻繁に用いられた手段としては、強制割り当て、脅迫、抽選、輪番、買収、ペテン、選挙などがあった。[6] 長汀県では、数十人の農民が集会所に集められ、出口に鍵をかけたうえで、全員が紅軍への加入に同意するまで家には返さないと脅された。[7] やはり、長汀県の事例であるが、河田区ソビエトの責任者がある村に赴いて、新兵の募集を行った際、誰も応募しないのをみると、十数歳の子供に「もしお前が行かないと、母親を監禁するぞ」といって脅し、紅軍に送ったという。[8] どれくらいの金額で農民を買収したかも資料に記載されている。地域によって違うが、一人およそ二元から三元、一部には二〇元が支払われたという記録もある。[9] 穀物で買収する場合もあった。[10] ペテンについていえば、農民を紅軍に送るために用いられた最も効果的なトリックは、その事例が何度も文書に登場することからみて、紅軍に入れば豚肉が食えると告げることだったかもしれない。[11]

しかし、農民と党幹部たちは、兵士の確保をめぐって、つねに対立していたわけではなかった。地方幹部たちの最大の関心事が、上級から命じられた割当量をともかくも満たすことにあったため、[12] しばしば彼らと農民たちの間で暗黙の協定が結ばれた。つまり、党幹部たちは、いやになれば村に帰ってくることができるとほのめかしながら、農民を紅軍に加入させようとしたのであった。[13] その結果、当然のように大量の逃亡兵が出現したのである。

（2） 逃亡兵たち

逃亡兵の問題がいつから指導者の目にとまりはじめたかを確定することは難しい。だが、閩西ソビエト政府は、早くも一九三〇年秋には、逃亡兵問題の深刻化に警鐘を鳴らしていた。同政府の報告書には、当時よく使われた

「革命高潮」（革命の高まり）という表現をもじって「逃兵高潮」（軍における逃亡熱の高まり）という表現が用いられている。[14] 翌年二月には、閩西ソビエト政府は、次のような通告を発するに至った。「最近、各級政府の紅軍拡大工作を検査したところ、これまで犯された命令主義の誤りについて、県級政府は相当程度理解したが、区政府はこれに次ぎ、郷政府は依然として非常に濃厚な命令主義に満ちており、依然として大衆を脅迫し、大衆を指名して紅軍に送っていることがわかった。……このため、現在、大衆は熱烈に紅軍に加入しないだけでなく、紅軍に持続的な絶えざる逃亡を発生させている」。[15]

逃亡は兵卒だけでなく、将校たちの間からも、ときには政治委員の間からさえ現れた。いくつかの報告書は、政治委員が兵士の集団逃亡を組織した事実を伝えている。[16] 逃亡兵は、軍の活動のあらゆる場面から出現した。行軍の最中、前線で戦っている際、戦闘が終わった後、そして野戦病院から、さらには兵士のために催された歓送会の席から、兵士たちは次々に逃亡した。しかも、多くの場合、彼らは手ぶらで逃げたわけではなかった。銃、金銭、およびその他の物資を持って逃げたのである。閩西ソビエト政府の報告によれば、「調査したところ、紅軍から銃および公物をもって家に帰る兵士は、各県すべてにいる」[17] のであった。

どのくらいの規模で逃亡者が出たのだろうか。興味深い点だが、不幸にも、この点に関する統計資料は見当たらない。しかも、中央ソビエト政府の機関誌である『紅色中華』の記事が指摘するように、地方幹部たちは、一方で確保された兵士の数を誇張して上級機関に伝え、他方で兵士の逃亡の事実を隠そうとする傾向にあった。[18] したがって、われわれは逃亡兵の数を正確に把握することを諦めざるをえない。とはいえ、個別的な事例ならいくつも挙げることができる。いくつかの例をあげておこう。一九三〇年一〇月二〇日、紅一二軍が竜巌を出発した際、兵員は二千人を数えた。しかし、一ヵ月以内に一、二〇〇人がいなくなった。[19] この数字が事実であるとすれば、兵力の六〇パーセントが逃亡によって失われたのであった。ここで、われわれは、中国の歴史において、紅

軍がどの程度新しいタイプの軍隊であったかという基本的な問題にあらためて直面するのである。もっとも、紅一二軍は「李立三路線」のもと、条件が整わないなかで無理やり進軍を命じられた特殊な事例であり、したがって逃亡兵の規模を検討する際の適切な事例ではないと主張することも可能であろう。だが、事例を積み重ねてゆくと、紅一二軍の事例は決して孤立したものではないことが判明する。一九三三年三月、寧化県淮陽区では、五〇〇名の新兵が召集された後、四〇〇名が逃亡したと報じられた。[20] その二ヵ月後、長汀県でもやはり召集された新兵の三分の二がいなくなったという。[21]「模範部隊」と称された部隊でも事情は変わりなかった。武平県金思区模範営でも、「先月、四、五〇人が逃亡した」と報じられている。[22]

閩西から少し視野を拡大して、中央根拠地全体を見渡しても、ほぼ同じ規模での逃亡兵の事例を見出すことができる。『紅色中華』に報じられた江西省の根拠地における逃亡の事例をひとつだけあげておこう。一九三三年三月、永豊、公略において、赤色少年先鋒隊員を一、三〇〇名、勝利、博生においては一、四〇〇名を前線に送ったものの、九日以内に大半が逃亡し、残った者は七〇〇名にすぎなかったという。この逃亡は政治委員を含む幹部が組織的・計画的に行ったもので、しかも食費まで持ち逃げしたとされている。[23] 筆者はすでに豫豫皖根拠地においても同様の現象を見出している。したがって、大量の逃亡兵の出現は、中央根拠地をはじめ、共産党の各根拠地に共通した普遍的現象だったとみてよいであろう。それは革命根拠地における社会的景観の一部をなしていたのであった。

それにしても、なぜこれほどの規模で逃亡兵が出たのだろうか。いくつかの要因を挙げることができる。第一に、それは先に述べたような新兵の募集方法の論理的帰結であった。少なからずの農民たちが、強制やペテンによって無理やり紅軍に送られており、またある場合には、村に戻ってきてもよいという暗黙の了解のもとで、紅軍に参加していたのである。しかも、彼らは村を去る前に、前線から無断で村に舞い戻ってきた多くの人々（後

で述べるように、彼らは地方ソビエトによって収容され、仕事を与えられていた）を目の当たりにしていたに違いない。とすれば、なぜこれら多くの逃亡兵たちの先例に従わないことがあろうか。

党自身の分析も、逃亡兵の出現の原因を主として兵士の補充方法に帰するものであった。たんに数量にのみ注意する募集方法を採用したために、富農や流氓、さらには処分を受けた党員など信頼の置けない分子が多数混入してしまい、軍紀を乱し、逃亡を促しているというのである。[24] たしかに、一九三〇年以前、閩西の紅軍はかなり積極的に流氓を抱え込んでいた。その後、彼らが軍にとって厄介な存在となったことは想像に難くない。[25] だが、兵士の階級成分の問題は、明らかに逃亡兵を生み出した原因の一部でしかない。

第二に、紅軍内部の兵士の待遇をあげることができる。例えば、紅軍兵士は、国民政府軍の兵士と同様、将校からさかんに殴られる哀れな存在であった。[26] 毛沢東も、有名な一九二九年一二月の「古田決議」のなかで、兵士を殴るあまりに「鍛冶屋」とあだ名をつけられた紅四軍の将校の存在に触れていた。「第三縦隊第八支隊の某将校の人を殴打したがる例である。その結果は、伝令兵や炊事夫のほとんどが逃亡したばかりでなく、軍の必要とする上官や副官まで逃亡してしまった。第九支隊第二五大隊では、かつてたいへん人を殴りたがる大隊長が来たことがあった。人々は彼に鍛冶屋と渾名をつけた。……兵士から将校にいたるまで一般的に士気の低下をきたし、逃亡者の数は日ましに増え、軍隊内に怨嗟の空気が充満し、自殺事件さえも生ずるにいたっている」。[27] 加えて、傷病兵および障害を負った兵士に対する扱いが杜撰なことは多くの党内文書が指摘している。[28] こうした兵営内部の社会関係も、逃亡兵の多さと同様、国民政府軍や軍閥の軍隊と紅軍の異質性よりは同質性にわれわれの眼を向けさせる。ついでにいえば、待遇の問題から、寝返ってきた敵軍兵士を紅軍内に定着させることも困難であった。「捕虜、および寝返ってきた兵士は、紅軍内の苦労に耐え切れず、また紅軍が数元の小遣い銭しか与えないのをみて、まもなく逃げてしまった」。[29]

そして第三に、共産党の逃亡兵に対する温和な扱いがある。すでに問題が十分に深刻化していたにもかかわらず、一九三三年春に『紅色中華』において主張された逃亡兵に対する方針は、主として説得を用いるよう定めていた。「逃亡した同志と逃亡兵に対しては、主として教育の方法を用いて説得し、自己の誤りを理解させ、自覚的に帰隊させるべきである。もし、何回もの勧告と教育を受けて、なおも逃亡した同志および逃亡兵を改悛させることができなければ、われわれは行政〔権力〕もしくは軍事規律をもって処理すべきである（例えば、逃亡者に以前支給した衣服、寝具、および食費を返還させ、労役を命じるなどである）」[30]。逃亡兵に対するこのような温和な措置は、反革命粛清運動のなかで「社会民主党」分子を多数殺していたことを考えれば、一見奇妙に思える。おそらく、これは逃亡兵が存在するはずはないというたてまえ――逃亡兵が大量に出現するとすれば、軍閥や国民党の軍隊と何の違いがあろうか――に縛られていたためであるよりは、厳しい処罰の方針を打ち出せば、新兵の補充がさらに困難となることを恐れたためであるように思われる。だからこそ、一九三三年一二月になってはじめて逃亡兵に対するいちおうの統一的方針が示された時でさえ、彼らに対しては、処罰よりも「宣伝と説得」を重視するとされたのであった[31]。厳格な処分をちらつかせることによって、農民を紅軍からさらに遠ざけるよりも、逃亡兵の出現を避けられない現実として受け入れつつ、その程度を抑制しようとする意図がはたらいたものとみえる。

さらにもうひとつの要因を付け加えておきたいと思う。それは結婚している兵士に限られるのだが、配偶者に関する不安である。つまり、前線にいる最中に、妻から離婚を突きつけられるのではないか、あるいは農村に残っている男たちに妻を取られるのではないかという不安である。実際、夫たちが紅軍兵士として村を離れている間に、妻たちから離婚を宣告される、もしくは村の男たちが残された妻たちに言い寄るという事件が頻発していた。他人の妻を奪おうとする男たちのなかには、村に逃げ帰った逃亡兵たち、および多数の党員が含まれていた[32]。

閩粤贛特委から党中央に送られた報告には次のような記述がある。「党員の享楽振り、例えば、紅軍になりたがらず、白区に行って工作しようとしないといったことだが、とりわけ配偶者を探す工作が、すべての工作よりも熱を帯び、配偶者探し熱の高まり（「找愛人的高潮」）を生み出している。各県はいずれも同じで、とくに機関の同志〔がひどい〕[33]」。そのため、ある県委員会は、「何人たりとも、紅色戦士の妻に対して進攻してはならないし、紅色戦士の同意を得ずして彼の妻と結婚してはならない」と決議したほどであった[34]。この事態を、農村革命におけるあまり意味のない挿話として片づけるべきではない。むしろ、それは中国農村における革命の社会学を理解するうえで、重要な鍵なのである。（筆者は、党自らが解き放ちながら、党権力から相対的に独立して展開する社会の諸過程を扱う革命の社会学が必要だと主張したい。従来の「党史」にはこのような視角が欠けている。）

共産党が村に持ち込んだ結婚と離婚の自由は、きわめて大きな衝撃を農村社会に与えていた。妻たちは色めきたって、亭主たちに三行半を突きつけていた。一種のジェンダー闘争が生じていたのである。その際、男たちも「解放された」（あるいは「解放前の」場合もある）女性たちを追い回していた[35]。その結果、結婚、離婚、再婚があちこちで繰り返され、極めて混乱した社会状況が生まれていたのである。鄧子恢は回想録において、一九二九年のことだと思われるが、百戸あまりからなる竜巌県白土区盂頭村において、婚姻の自由を認めた条例が公布された後、わずか一ヵ月のうちに三六組の夫婦が離婚し、また三六組の夫婦が新たに結婚したと記している[36]。福建省ソビエトの通告が、いくつかの地方で、私生児、嬰児が捨てられ、あちこちで命を落としていると記しているのは、こうした社会的混乱の哀しい副産物であったかもしれない[37]。かくして、地方ソビエトの多くは、連日、婚姻問題で上を下への大騒ぎをしていたのであった。閩西特委の報告によれば、「県・区ソビエトのもうひとつの中心工作とみなされているのが離婚・結婚問題である[38]」。「竜巌県委は、婦人の離婚に関する案件をいくつか抱えない日はまったくない[39]」。また、福建省ソビエトも次のような驚くべき状況を伝えている。「各地で離婚・結婚を要

求する青年男女が十数人、数十人と群れをなしてソビエトに押し寄せている。お互い相手を取り替えるものあり、片方だけ取り替えるものあり、ひとたび離婚を許すと、すぐに結婚する。最も遅いものでも、二日目には相手を見つけて結婚する（というのも、彼らのほとんどは以前から秘密の関係があったからだ）。ここ一ヵ月、郷、区、県のソビエト裁判委員は一日中これらの案件を処理している」[40]。そうなると、項英が、実は兵士の逃亡より、結婚問題のほうがもっと深刻なのだと示唆しているのも、あながち誇張であるとは言い切れないのである[41]。

このような事態を、党が事前に予期していたとは考えにくい。農村における階級闘争には容易に火が点かなかったのに、異なる性の間の闘争（と関係の再編）は簡単に燃え広がってしまったのだ。婚姻問題をめぐる騒ぎは共産党を、女性を解放して彼女たちを革命の道に引き込むという目標と紅軍兵士の不安の解消という要請の狭間で窮地に陥れた。党の方針はどうみても一貫性を欠いていた。一九三〇年夏、閩西ソビエト大会は、紅軍兵士の妻が離婚を突きつけることができるかという問題について、離婚は認められないが、それは当面のことだと留保を付した決議を採択した[42]。だが、翌年秋に党が採択した「紅軍優待条例」は、はっきりと紅軍兵士の側に立ち、「およそ服務期間中の紅軍兵士の妻が離婚するには、まず戦士本人の同意を得なければならず、同意を得ていないうちは、政府はその離婚を禁止することができる」と定めていた[43]。ところが、その数ヵ月後、『紅色中華』誌上で、紅軍兵士に動揺を与えかねないという観点から自由な結婚・離婚に疑問を提起した永定県委に対して、項英は中央ソビエト政府を代表してあくまでもそれを弁護してみせたのであった[44]。

ともあれ、以上の諸要因が背景にあったとすれば、ほとんどの逃亡兵が国民党に寝返るのではなく[45]、自分の村に舞い戻ったのは当然であった。逃亡兵が村へ帰る際、本来ならば、各地のソビエト政府が、彼らの通行証を検査し、帰郷を阻止するはずであった。だが、実際には、彼らは「途中、いささかも阻止されることはない」。というのも、各ソビエト政府が通行証の検査を真面目に行っておらず、「一部の逃亡兵は勝手に証文を偽造し、そ

れに私印を押しているが、それでも通行できる」からであった。[46] 通行証の検査はかなりいい加減に行われていたようである。福建省ソビエトの文書が示すところ、「検査所が設置されているにもかかわらず、検査に責任を負うものが少しも責任を果たしていない。ある者は店の中で雑談し、ある者は厨房で飯を作り、ある者はもっぱら商売をするか、手工業にいそしんでいる。とりわけ、痾屎崗では、検査員が五、六人一緒になって談笑していて、通行人を放っておいている」。[47]

彼らは村に戻っても、村人から白眼視されることはほとんどなかったようにみえる。なるほど、いくつかの村および区では、女性と子供が「突撃隊」に組織されて、逃亡兵を慰問し、彼らを部隊に戻す努力がなされたが、[48] そのような努力が行われた地域は限られていた。それどころか、顎豫皖根拠地の場合とまったく同じように、これらの逃亡兵たちの多くは村に戻った後、村ソビエトや区ソビエトから歓迎を受け、地方の防衛に関する仕事を与えられていたのである。一部のソビエト政府の委員たちは、当地出身者が戦闘員・指揮官として紅軍に服務していると、わざわざ紅軍に出向いて、彼らの帰郷を認めるよう要求する始末であった。[49] これはしばしば省委員会、および県委員会によって「地方主義的」と批判された傾向であった。

したがって、農民が「したたかな抵抗」によって党の動員計画を「下から」掘り崩していたというイメージは単純化されすぎている。むしろ、党の地方幹部と農民が共同で、党中央、中央ソビエト政府、および省委員会の計画を台無しにしていたのであった。このような状況のもとでは、「百万の鉄の紅軍」を作り上げるという目標は、失敗を運命づけられていたといわなければならない。

一九三一年以降、閩西で本格的な軍拡ドライブが開始されてから、果たしてどれくらいの農民が紅軍兵士となったのか、統計的にはまったく確認のしようがない（逃亡兵が多く存在したとすればなおさらである）。だが、党指導部が繰り返し発した動員キャンペーン失敗の言明から判断すれば、計画はやはり不首尾に終わったと判断する

ほかはない。一九三二年二月に中央革命軍事委員会は、五ヵ月以内に紅軍の主力部隊を倍増させるという目標を掲げたが、四ヵ月後、「いまになってもなお目標からはなはだかけ離れている。赤色五月の突撃月間にも、あらかじめ定めた人数を達成できなかった」と報告している。[50] 同年九月、ソビエト区中央局も、夏の紅軍拡大運動がきわめて不調に終わったことを認めざるをえなかった。「中央局は、七、八、九の三ヵ月間の紅軍倍増突撃期間の活動を点検して、七月、八月の江西・福建両省、とくに福建の紅軍拡大の成績がきわめて不満足なものであることを認めた。……閩西で七月、八月の二ヵ月間に拡大した紅軍は、わずかに所定計画の一三分の一にしかあたっておらず、拡大新戦士の中には、老弱者・子供が少なからぬ数を占め、しかも一部には逃亡者が生じている。[51]」。同月、中華全国総工会は、一〇月革命記念動員として、九月から一二月の四ヵ月間で、福建省において二、二〇〇名の労働者を紅軍に送ることを決定したが、[52] 福建省が七月から一〇月までの四ヵ月間のうちに、福建省が紅軍に加入させた人間の数（労働者、農民を問わない）が、合計一、三〇四名と報じられたことからすれば、実際に新兵として動員された労働者の数は目標を大きく下回っていたと考えざるをえない。[53] 一九三三年になっても状況が改善されたようにはみえない。一九三三年三月に第四回反包囲討伐戦の勝利が宣言された後、同年五月を紅軍拡大の「突撃月間」とし、福建省で新たに二千人の兵士を紅軍に送ること、続く六、七月の両月においては毎月一、五〇〇人を送ることが決定された。[54] だが、いかなる文書もこの計画が達成されたと示唆してはいないのである。『紅色中華』の記事は、福建省ソビエトが、一九三四年一月以前、紅軍拡大の目標を何ら達成できなかっただけでなく、「逃亡兵の多さは、さらに人を驚かせる」と指摘している。[55] 一九三四年九月にも、中央組織局は一ヵ月のうちに福建省で二、三〇〇人の新兵を動員するよう通知を送った。[56] だが、動員は計画の六〇パーセントを達成したに過ぎなかったと報告された。[57]

もちろん、党指導者たちは最初から無理を承知で過大な目標を根拠地に押し付けていた可能性はある。だが、

農民が紅軍加入に対して示した消極的な態度、そして逃亡兵の多さは、彼らの想定外のものだったに違いない。してみれば、われわれは閩西を含む中央根拠地の最終的な崩壊の原因を、たんに党の軍事戦略・戦術の問題のみならず、動員能力にも求める必要があるだろう。

（3） 地方武装と農民

紅軍に対する農民大衆の態度は、彼らの地方武装に対する態度と比較することによって、いっそう理解しやすくなる。党が革命根拠地で組織した地方武装の中核に存在したのが、遊撃隊、赤衛軍、および少年先鋒隊であった。遊撃隊は県ソビエトによって指揮される武力であり、赤衛軍（資料には赤衛隊という表現もしばしば用いられている）は区ソビエトが指揮権をもっていた。「赤衛軍、少年先鋒隊はたんに広範な大衆の武装組織であるだけでなく、ソビエト区を強化し、紅軍を補充する守備軍であり、補充隊でもある。正規の紅軍は兵力を使用する側であり、赤衛軍、少年先鋒隊は兵力を蓄える側である」[58]。赤衛軍には、一八歳から四〇歳までの労農勤労大衆（男女とも）すべて加入するはずであった[59]。少年先鋒隊には、一六歳から三五歳までの男女がみな加入を義務づけられていた（したがって、この年齢層の男女は、赤衛軍か少年先鋒隊のいずれかに加入しているはずであった）。

興味深いのは、いくつかの党内文書が、大衆が遊撃隊および赤衛軍に積極的に参加していると指摘していることである。たしかに、党指導者の眼からみて、遊撃隊からの隊員の逃亡も紅軍兵士の逃亡に劣らず深刻であった[60]。だが、地方武装からの逃亡者は比較的少なく、また容易に部隊に戻すことが可能だというのである。閩西特委の観察によれば、「一般大衆は普遍的に、当地の遊撃隊と赤衛隊の工作には進んで参加しようとする。というのも、これらの武装力は、いずれも当地から数十里内の範囲で遊撃を行うからだ。……遊撃隊は各県で工作を行い、地方性を帯び、逃亡兵は比較的少ない。逃げ帰ってきても容易に帰隊を促すことができる。一般兵士の態度も悪く

ない[61]」。

だからといって、遊撃隊や赤衛軍が厳格な組織であったというわけではない。むしろ、地方武装の組織と工作は、つねに党指導者の批判の対象であり続けた。繰り返される略奪、敵に対する寝返り、銃の持ち逃げ、勝手な休暇、さらには間歇的な仕事振りは、指導部を嘆息させるに十分だった。項英の報告によれば、「各地方の武装は少なくないが、赤色地域を打ち固めるのに使用されておらず、ただ土豪を打ち、白色村落を略奪するだけだ。遊撃隊、赤衛隊の念頭にあるのは金を稼ぐことだけだ。そのため、赤と白が接する地方の白色村ではこういう。『洋共は恐れないが、土共を恐れる』。なぜなら、土共はただ物を奪うことを知るのみだからだ。完全に白が赤を打ち、赤が白を打つ依然として部落式の戦争が行われている[62]」。寝返りと銃の持ち逃げについていえば、『紅色中華』は一九三三年一一月から翌年一月に渡る三ヵ月間、連城県だけで、遊撃隊から敵に寝返ったものが一一三名、持ち去られた銃が一〇六挺あったと報じている[63]。また、福建省委によれば、福安中心県委における遊撃隊員は百人に過ぎないが、政治工作が軽んじられており、隊員はしばしば休みを取って遊撃隊にいようとしないのであった[64]。さらに、党中央から派遣された巡視員が厦門の遊撃隊について記した報告書の示すところ、「遊撃隊は一種秘密裏に土豪を打ち、人質にしており、大衆の実際工作を支援することは非常に少ない。……一人の土豪を打つと、一、二ヵ月行動しない[65]」。

加えて、地方武装は濃厚な地方主義によって特徴づけられていた。次の引用文は、地方主義の現れ方を雄弁に物語っている。「政治武装――政治訓練は非常に不足している。しかも、甲区の武装はただ甲区でのみ勇敢に戦うことができ、乙区に動員すれば、戦闘能力がなくなってしまうのだ。組織は厳密でないだけでなく、指揮も系統だっておらず、ときどき甲区の武装が乙区の指揮を受けようとせず、あるいは乙区の武装が、丙区に行って戦争しようとしないといったことが起こる。はなはだしきは、ちょっと負け戦になると、続々と各自が帰ってしま

い、誰の指揮も受けない。これは何を証明しているか。明らかに、政治宣伝上で、彼らの地方主義を打破していないことが原因である」[66]。

このような徴候からして、われわれは党によって農村に持ち込まれた新たな制度が、本来の目的から離れ、いかに農民大衆によって彼ら自身の目的のために勝手に流用されていたかを知るのである。彼らは自分たちの村とその周辺――おそらく郷のレベルを超えることはほとんどあるまい――の防衛には関心を持ち（だからこそ、ある程度の訓練と戦闘経験をもつ紅軍からの逃亡兵は村で重用されたのだった）、たいていの場合自らも貢献を惜しまなかった。だが、村を大きく越える範囲の防衛となると、話は別である。地方武装が、構成員の生活圏を越える範囲で活動するとき、それに参加する人々の目的は、根拠地全体の防衛どころか、略奪になりがちであった。その限りで、農民は地方武装の意義を認め、これに加わろうとしたのである（逆に、村の防衛にも役立たず、略奪もできないとしたら、地方武装に加わる意義などどこにあるだろうか）。もっとも、その参加の仕方は、彼らが農村の伝統的組織に参加する仕方そのものであったようにみえる。仕事振りは間歇的で、休みが多く、固定されたメンバーなどまず見当たらない。党は戦争のための総動員をやかましく叫んでいたのに、肝心の農民のほうはといえば、党内文書から垣間見えるその姿はどこか牧歌的なのである。

（4） 土地改革は動員の梃子となったか

このようにいえば、共産党の動員能力を過小評価したことにならないであろうか。党は曲がりなりにも革命根拠地においてさまざまな社会改革を試みていたのだから、その成果から得られるはずの支持を基盤にして、比較的高い動員能力を見せつけることができたのではないだろうか。とりわけ、共産党の伝家の宝刀である土地改革は、農民を従わせる強力な梃子として機能したのではあるまいか。

たしかに党自身、当時、土地改革こそが農民を動員する際の鍵であると主張していたし、現在でもそのように主張している。[67] 中共ソビエト区中央局の決議によれば、「闘争が深化し、土地問題が比較的徹底して解決された地方では、どこでも紅軍拡大の成績がよく、反対に紅軍拡大の成績がいちばん悪い区域では、やはり闘争が深化せず、土地問題の解決がもっとも劣っている」。[68] また、中華全国総工会の機関紙も同様に次のように述べる。「われわれは明らかに見て取ることができるのだが、土地〔問題〕を徹底的に解決した地方（例えば興国など）では、大衆の自覚と大衆の革命戦争への参加、ソビエト政権に参加して闘争する積極性も大いに高まったのである」。[69]

だが、本当だろうか。

いわゆる「土地革命戦争時期」において、土地改革をめぐり、コミンテルンとそれに忠実な中共中央、ソビエト区を指導する党の最高機関であるソビエト区中央局、そして革命根拠地の現場指導者の間で、路線の対立が存在したことは、従来の研究がかなり詳細に明らかにしてきた。[70] 対立の構図を単純化すれば、コミンテルンおよびそれに忠誠を誓う党中央が、土地の国有化、地主・富農に対する過酷な取り扱い、そして人口と労働力を混合した基準による土地分配を主張したのに対して、根拠地における土地改革の現場においては、農民的土地所有、地主・富農に対する比較的温和な取り扱い、主として家族人口を基準とした土地分配が主張されたのであった。[71] だが、ここで問われるべきは、土地改革に関する党の意図、戦略、計画ではなく、むしろ実態である。閩西根拠地において、現実に土地改革はいかに行われ、またそれは農民を党のもとに引きつけ、また従わせるのにどの程度有効だったのだろうか。

結論からいえば、土地改革は党指導者が意図したほどの効果を上げられなかったように思われる。まず、閩西根拠地のかなりの部分で、それは満足に実施されたようにはみえないのである。永定、上杭、竜巌の一部では、一九二八年の失敗に終わった暴動に際して、土地分配が行われたが、その成果は旧支配勢力の反攻によって水泡

に帰した。[72] これらの地域では、その翌年、紅四軍が閩西に侵攻した際、その支援を受けて再び土地分配が行われた。[73] だが、他の県の実施状況はといえば、はなはだ心許ないのである。一九三二年八月の時点においても、党中央から派遣された巡視員は次のように報告書に記している。「土地革命は深く進行していない（例えば、長汀の各新ソビエト区において）。……各種の大衆団体――多くの地方の、例えば、雇農工会、貧農団は単に形式にすぎず、指導作用を果たすことができない」。[74] 同年末の福建省ソビエトの報告も、土地改革の進展が遅々としたものであることを認めていた。「新たにソビエト区となったところでは、依然として大部分の土地が分配されていない。すでに分配が終わった区域では、依然として土豪が各種の粉飾のもとに土地を保有し続けている」。[75] 査田運動の最初の呼びかけとなった一九三三年六月の中華ソビエト共和国中央人民委員会の訓令においては、「土地問題を徹底的に解決していない地方」が列挙されているが、そのなかに閩西では寧化、長汀、武平の全域、および上杭、永定、新泉の一部が含まれていた。[76] 一九三四年一月から本格的に開始された蔣介石による第五回目の包囲討伐作戦において、同年四月に竜巌、新泉が占領され、六月までに永定、上杭、武平、連城が支配された事実に鑑みて、閩西において土地改革は多くの地方で実施されていないか、実施されたとしても、変転著しい戦況のなかで、その成果は少なからざる地方で覆されてしまったと考えるべきであろう。ついでにいえば、福建省沿海部の根拠地では、一九三四年になっても、土地改革はほとんど実行されていなかった。福建省委の述べるところ、「福安中心県委は、積極的かつ迅速に党内で、大衆の間で、党の土地綱領とソビエト土地法令、土地分配の方法を宣伝し、説明していない。……だから、福安、寿寧に近い県・区においては、このように大きな遊撃区域であるにもかかわらず、現在に至っても土地革命を実行した郷村はひとつもない」。[77]

次に、たとえ土地の分配にまで漕ぎつけた地区でさえ、それが直ちに党の動員能力の向上に結びつくとは限らなかった。それにはいくつかの理由がある。第一に、土地分配は直ちに十分な恩恵を農民にもたらしたわけでは

なかった。福建省ソビエトによれば、土地を分配されても、労働力に余裕のある農民には土地が狭く、また分配された土地が分散していて、生産が減少する場合もあった。[78] 生産量が上がった場合でも、米価の下落が農民の利益を増やさなかった。[79] かくして、農民は土地を分配されても、直ちに食うに困らなくなったわけではなかった。閩西特委の報告の示すところ、「暴動後、土地を分配した。人口による均分を原則として男女、老幼、労農、雇農を問わず一律に分配した。このように分配しても、十分に食べられるのは竜巌だけで、その他の県では十分に食べられないものが多い。……閩西全体の食料が不足しており、江西瑞金一帯の米に依存している」。[80]

第二に、農民はいったん土地を得るとすぐに保守化する傾向にあった。閩西特委は土地分配後の農民の精神状況を次のように描いている。「土地革命が達成されてから、農民大衆は十分に享楽的になり、ただ各自の生活を考え、積極的に外へ拡大しようとしない。保守主義は非常に濃厚で、紅軍に加入するのを恐れ、動員されるのを恐れ、外に出て工作するのを恐れている。歩哨や警戒工作でさえも怠けてやっている。上杭東五区では、一度団匪が区政府の門前までやってきたところで、ようやくこれに気づく有様だった。……奥地の大衆はもっと享楽的だ」。[81] 結局のところ、農民大衆は土地分配が終われば、「革命」は成就したと考えたのであった。[82] せっかく土地を手に入れたというのに、わざわざ紅軍兵士となって村を離れることなどどうしてできただろうか。一九三三年六月当時、福建省ソビエト副主席として長汀県で動員工作に携わっていた温必権も当時を回想して、農民は土地を分配されてひとつの小家庭を打ちたて、安楽に平穏な日々を送りたいと願うようになっていた。だから、紅軍拡大にも、担架隊の活動にも以前ほど積極的ではなくなっていた。動員につぐ動員を行っても任務を達成できなかった、と述べている。[83]

第三に、土地分配の前提となる土地の没収に際して、地方幹部がしばしば「左」に走りすぎ、富農に対する打撃が中農にまで拡大されたため、ときに貧農ですら恐慌に陥ることがあった。[84] 温必権の語るところ、上から与え

られた方針は、地主には土地を与えず、富農には悪い土地を与えるとのことだったが、彼らは行き過ぎだと考え、地主には労働力に応じて悪い田を与え、富農にも悪田のほかに少しだけ良田も与えた。しかし、それでも中農は不安を抱き、少なからずの者が白区に逃亡したという。[85] 土地改革における打撃対象の事実上の拡大――党中央はこれを何度となく戒めたのだが――は、党が動員しうる階層の幅を確実に狭めたであろう。以上を要するに、土地改革は閩西においては、広範に実施されなかったし、実施された場合でも、農民を自在に動員する魔法の杖とはなりえなかったのである。

(5) モデル地区――上杭県才渓郷

しかし、強調しておかなければならないが、目標を大きく下回ることになったとはいえ、紅軍が一定の兵員数を確保することは可能であった。それは主として二つの方法によっていた。どちらの方法も、動員の対象となる人々の範囲を極端に絞り込み、そこから可能な限り多くの人間を引き出すことであった。ひとつは、「模範区」すなわちモデル地区を構築することであり、もうひとつは、それまで限られた地域的単位でのみ活動してきた地方的武装力――例えば、遊撃隊や少年先鋒隊といった部隊であるが――を丸ごと強制的に紅軍に編成することであった。

まず、モデル地区について述べるなら、それはいくつか存在したが、その代表例は、毛沢東が自ら関与した上杭県才渓郷（正確には、上才渓郷と下才渓郷からなる）であった。[86] そこでは、一九三二年春以降、成年男子の大部分が紅軍に動員された。毛の記すところ、上才渓郷の青年男子五五四名のうち四八五人（すなわち八八パーセント）が紅軍兵士となり、下才渓郷の七五六名の青年男子中、五二六人（七〇パーセント）が紅軍に加入した。[87] 張鼎丞も、はっきりと時期を示してはいないが、才渓における動員について次のように回想している。「上杭才渓

は二千人余の人口であったが、幾度かにおよぶ軍拡運動の後、壮丁は七人しか残らなかった。それでもさらに軍拡を続けようとしたのだ」[88]。その結果、おそらく一九三三年秋まで、上杭県は福建省における紅軍兵士の最大の供給源であり続けた[89]。健康な男子だけではなく、子供、女性、老人といったあらゆる社会的カテゴリーが戦争遂行のために何らかの役割を与えられた――生産活動の維持、パトロール、逃亡兵の説得などの仕事である。紅軍を慰労する活動も熱心に行われた。『紅色中華』は紅軍兵士の慰労活動に関して、上杭県を「全中央ソビエト区第一の栄えある模範」と讃え、次のように書いている。「わが紅軍が上杭才渓・官庄一帯を通過した際、大衆の熱烈な歓迎を受けた。とりわけ、女性少年先鋒隊員が手に手に棍棒を持ち、絶え間なくスローガンを叫ぶのに大いに勇気づけられた。このほか、野菜、漬物などの慰労品は小山をなした」[90]。このように、才渓郷は当時、動員の成功例として大いにもてはやされた。

ところが、これはよくみると共産党の動員力の高さを示すというよりは、その限界を指し示す事例なのである。第一に、モデル地区は、空間的には、区の範囲、いいかえれば郷の範囲を越えて広がることはなかった。才渓郷以外の他の上杭県の区に関していえば、紅軍への動員成績はじつに様々であった。一定期間に、紅軍にわずかしか、あるいは誰一人として送り込むことのできない区も存在した[91]。第二に、才渓郷は、モデルとして二年以上持ちこたえることができなかった。一九三四年一月以降、才渓郷はなぜかモデルとしての地位から転落し、逆にその動員成績の悪さが、厳しく批判されることになる。『紅色中華』は同年五月、上杭県の動員状況について次のように書いている。「二ヵ月にもわたって紅軍家族のために労働力を差し向けていない。主人と二人の子供が紅軍に加入しているために家に労働力がなくても政府は構わない。一部の赤衛隊、少年先鋒隊も耕田隊に参加しない。……紅軍家族の労働力を助ける者も『飯を食わせろ』という」[92]。したがって、共産党が構築しえた動員のモデル地区とは、空間的にも時間的にも、ごく限られたものにすぎなかったのである。

次に、地方武装を丸ごと紅軍に編入するという方法についていえば、その先駆となったのが一九三三年二月頃、長汀県で行われた赤衛軍と少年先鋒隊の紅軍への編入であったようにみえる。[93] 長汀県はこの方式の成功によって、上杭県が模範区としての地位から滑り落ちた一九三四年一月以降、一躍脚光を浴びたのであった。『紅色中華』は次のように報じている。「各地で赤衛隊と少年先鋒隊を紅軍に加入させる動きが相次いでいる。……長汀ではまた六〇〇人が動員された。……長汀は四月中に、四月と五月に拡大する予定の紅軍の目標を達成してしまい、さらに目標の倍を達成するとの目標を提起して、いままた達成したのである」。[94]

おそらく、このような方式がある程度成功を収めたために、党指導部はたびたびその必要性が論議されていた徴兵制の採用を結局見送ったのであろう――もっとも、徴兵制はソビエト政府の行政能力からして、またそれを実施した際に予想される農民大衆の反発からしても、不可能だったかもしれないが。[95]

だが、地方武装を丸ごと強制的に紅軍に編入するという方式の「成功」は、図らずも、党が大衆組織を通じた農民の紅軍への動員に失敗したことを物語っている。本来、党が目指していたのは、貧農団や労働組合や反帝国主義同盟といった大衆団体を通じて大衆を説得・教育・訓練し、彼らを革命の大義に十分引きつけ、そして自発的に紅軍に引き入れることであった。しかし、このような方法はうまくいかなかった。そもそも、大衆団体は、そのほとんどが党員による「包辦」（一手引き受け）であり、たんに機関があって大衆が存在していなかった。ある場合には、たんなる金集めの機関と化していた。[96] その結果、大衆組織は、大衆を引きつけることができなかった。「模範区」である上杭県においてさえ、紅軍の拡大に際しては、大衆団体はほとんど役に立たなかった。「工会、雇農工会、貧農団、互済会、反帝ソ連擁護同盟は動員したか。まだだ。熱心でない。もっとも不十分だ！まったく不十分だ！」。[97]

模範区における徹底的な動員と地方武装の紅軍への丸ごとの編入が示唆することは二重である。一方で、これ

らの方法を用いて、長続きしない局所的総動員をいくつか積み重ねれば、目標には大きくおよばなかったとはいえ、ある程度の兵員数およびその他の戦争遂行に必要な資源を確保することは可能であった。

食糧の動員についてもいくらか述べておこう。少なくとも、一九三三年を迎えるまで、閩西を含む中央根拠地において、紅軍への食糧供給が深刻な問題となっていた徴候はほとんど見当たらない。実際、一九三二年末に出された中央ソビエト政府の戦争動員に関する指令をみても、戦時公債の売りさばきに関して指示があるものの、食糧については、たんに節約が呼びかけられていたにすぎなかった。だが、翌年二月に洛甫が二〇万担（一担は五〇キログラムに相当する）の穀物を大衆から「借り入れて」紅軍に供給することを指示して以降、穀物の節約、借り入れ、そして徴発を目的としたキャンペーンが中央ソビエト区全域にわたって展開されたのであった。このキャンペーンがどの程度成果を収めたかははっきりしない。一九三四年初夏に、二四万担の食糧動員が叫ばれたが、この目標はおそらく達成されなかった。『紅色中華』の報道によれば、「紅軍の給養を保証するために、二四万担の食糧を緊急に動員する運動は、九日までに、われわれが得た各県の報告では、わずかに四二パーセントが達成されたにすぎない。……第一に運動の展開が不均衡である。興国、瑞金は目標を達成し、また超過した。……しかし、多くの県が遅れている。……福建の各県も展開が異常に遅れている。……節約運動は各県で比較的よい成績を収めているが、没収徴発および借穀はまだまだである」[98]。おそらく、このように運動が不首尾に終わったためであろうが、以上の文書が出た直後、秋の収穫後に六〇万担の穀物の借り入れを新たに指示する文書が出された[99]。ところが、ほぼ同じ頃に出された中共中央の文書は、「幅広い労農大衆が、党とソビエトによる二四万担の穀物を動員せよとの号令に熱烈に応えてくれたために、われわれの勇敢な紅軍に今年の夏は十分な給養が与えられた」と運動の成功を讃えているのである[100]。したがって、食料動員の面で、中央ソビエト区がどの程度成果をあげたかについて、党中央と中央ソビエト政府の認識は一致しないようにみえる。だが、少なくとも、紅軍

への食糧供給が逼迫していたようにはみえない。たしかに、一九三三年五月には、食糧不足が、「中央ソビエト区の多くの地方で、すでに深刻な問題となっている」と指摘する報道もみられる。[101] とはいえ、紅軍兵士の食糧不足を指摘する文書を筆者は見出すことができなかった。もし、紅軍が十分な食糧を確保できていたとすれば、その限りで、食い詰めた村の男たちのなかに紅軍への加入を希望するものがいたとしても不思議ではない。

したがって、このような党と軍に過酷な戦争をたたかう力が無かったとはいえない。実際、閩西根拠地は、国民政府の内部分裂に助けられたという側面はあるにせよ、数度におよぶ蔣介石の包囲討伐作戦を生き延びることができたのだった――もっとも、十分に態勢を整えた国民政府軍の前には無力であったが。

他方で、このような動員状況は、沸きあがる労農の大衆運動の背に乗って力強く成長する共産党というイメージからわれわれを遠ざけてしまうのである。代わって浮かび上がるのは、時に熱烈だが次の瞬間には休眠状態に陥ってしまうような、空間的にも時間的にも限定された、移ろいやすい支持をかき集めて、どうにか支配地域を維持する党の姿である。

中国共産党の動員能力に関連して、それを当時すでに中国農村に存在していた他の社会集団の動員能力と比較しておくことは有益であろう。おそらく、共産党は大衆動員において突出した能力を有していたわけではなかった。むしろ、ある場合には秘密結社におよばなかったのである。閩東の福安一帯には、法兵なる「迷信を利用した」秘密結社が根強い勢力を誇り、一部の党員は党よりもこの組織に引きつけられていた――だとすれば、党が動員の主体ではなく客体であった可能性がある。この組織は、多くの労働者と農民を抱え、地主と軍閥に対して勇敢に攻撃を仕掛けていた。福建省委によれば、福安中心県委は、法兵が大衆に「麻酔をかけ」勇敢に彼らを戦わせる様子にすっかり心を奪われてしまい、これに学ぼうとしていたのであった。[102] 別の場合には、共産党のアピールは、同じように土地問題の解決を掲げる国民政府の一九路軍におよばず、大衆は同軍のほうに引きつけられ

ていた。[103] したがって、ここでもまた、われわれは共産党を特別の能力を持った存在だとみることはできないのである――少なくともこの時点においては。

（1）中華ソヒエト共和国臨時中央政府中央執行委員会「命令第一二号――戦争のための緊急動員について」（一九三二年一〇月一三日）、『資料集』第六巻、一三三頁。
（2）中共ソビエト区中央局「江西およびその近隣諸省における革命の首先的勝利の獲得についての決議」（一九三二年六月一六日）、『資料集』第六巻、九七頁。
（3）「左権、施簡報告」（一九三〇年一二月二九日）、『福建文件』（閩西）、二四〇頁。
（4）「徐萍向党中央報告」（一九三一年一月一四日）、『福建文件』（閩西）、一五頁。
（5）中共ソビエト中央局「紅軍拡大についての決議――七、八両月の紅軍拡大工作の点検」（一九三二年九月七日）、『資料集』第六巻、九四頁。
（6）「中共閩西特委拡大会議決議案」（一九三〇年一〇月二二日）、『福建文件』（閩西）、一七四頁。
（7）漢年「工人師少共国際師動員総結与今後四個月的動員計画」、『闘争』第二四期（一九三三年八月二〇日）。
（8）「中央蘇区長汀県拡大紅軍怪現象」（一九三二年一二月）、『福建文件』（各県委文件）、六七頁。
（9）「中央蘇区上杭県第一期拡大紅軍的総結」（一九三二年一〇月二八日）、同右、五五頁。
（10）漢年「工人師少共国際師動員総結与今後四個月的動員計画」、『闘争』第二四期（一九三三年八月二〇日）。
（11）例えば、「中央蘇区長汀県拡大紅軍怪現象」（一九三二年一二月）、『福建文件』（各県委文件）、六八頁を参照のこと。
（12）ノルマを達成するために、少年先鋒隊や工会、さらに地方保衛局などの単位同士がお互いに兵士を奪い合うという事態も生じていた。詳細については、漢年「工人師少共国際師動員総結与今後四個月的動員計画」、『闘争』第二四期（一九三三年八月二〇日）を参照されたい。
（13）「給那些消極怠工貪汚腐化退却逃跑官僚主義的人們」、『紅色中華』第一三九期（一九三三年一月一日）。ここには、ある紅軍兵士の家族から労働力を派遣してくれるよう求められた郷ソビエト代表が、「よその家の子供は、紅軍に行

っても、皆逃げて帰ってくることがわかっている」と述べた例が記されている。

(14) 「閩西蘇維埃政府通告第六号」（一九三〇年一〇月一二日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、二四八頁。また、次の文書も参照のこと。「黄坊区行動委員会第四次支書聯席会記録」（一九三〇年一〇月六日）、同右、二四五頁。

(15) 「閩西蘇維埃政府通告第十七号」（一九三一年二月一〇日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三一年―一九三三年）、二八頁。

(16) 例えば、「閩西的一般政治情形」（一九三〇年一二月二九日）、『福建文件』（閩西）、二五六頁、および「大批赤少隊員開小差」、『紅色中華』第六六期（一九三三年四月二日）を参照されたい。

(17) 「閩西蘇維埃政府通令第一号」（一九三〇年一二月八日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、三〇六頁。

(18) 「怎様開展反対開小差的運動」、『紅色中華』第六八期（一九三三年四月一一日）。江西省長勝では、一九三三年九月、紅軍に三千人を動員したと報じられたが、実際には二七〇人しか動員されていなかったことが後になって判明したという。「誇大狂！長勝吹牛屁的動員工作」、『紅色中華』第一二三期（一九三三年一一月二日）。

(19) 「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一一月二九日）、『福建文件』（閩西）、二一〇八頁。

(20) 「這還算是『模範』嗎？」、『紅色中華』第五六期（一九三三年三月三〇日）。

(21) 漢年「工人師少共国際師動員総結与今後四個月的動員計画」、『鬪争』第二四期（一九三三年八月二〇日）。

(22) 「第二次開大差」、『紅色中華』第六八期（一九三三年四月一一日）。

(23) 「大批赤少隊員開小差」、『紅色中華』第六六期（一九三三年四月二日）。

(24) 「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一一月二九日）、『福建文件』（閩西）、二一〇八頁。

(25) 「緑林の兄弟たちが紅軍に加入することを歓迎する」とうたった「告緑林弟兄書」（一九二九年、月日不詳）、『選編』中、四七六頁と、「一般的にいって、彼らは十分な反革命性を備えている。彼らはやむをえない場合に投機的に革命の隊伍に加わるが、彼らは終始動揺しており、いつでも裏切り、反革命の走狗となる可能性がある」とした「流氓問題――紅四軍前委閩西特委連席会議決議案」（一九三〇年六月）、同右、五一三頁を比較すれば、その間の流氓に対する党の姿勢の変化は明らかとなる。

(26) 「中共閩西特委拡大会議決議案」（一九三〇年一〇月二二日）、『福建文件』（閩西）、一七五頁。
(27) 「紅軍第四軍第九回党員代表大会（古田会議）の決議」（一九二九年一二月）、『資料集』第四巻、五八三―五八四頁。
(28) 例えば、同右、五八六頁。また、「中共閩西特委拡大会議決議案」（一九三〇年一〇月二二日）、『福建文件』（閩西）、一七六頁も参照のこと。
(29) 「閩西出席全国蘇代会代表的報告」（一九三〇年五月一八日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、一四六頁。
(30) 沙可夫「反対官僚主義消滅逃兵現象」、『紅色中華』第六五期（一九三三年三月三〇日）。
(31) 「関於紅軍中逃跑分子問題」、『紅色中華』第一三六期（一九三三年一二月二五日）。
(32) 「中共上杭県委関於十月分拡大紅軍工作報告」（一九三二年一〇月三〇日）、『福建文件』（各県委文件）、六三頁。また、「中共閩西第一次代表大会決議案」（一九二七年七月）、『福建文件』（閩西）、八八頁も参照されたい。
(33) 「徐萍向党中央報告」（一九三一年一月一四日）、『閩粤贛』（一九三〇年―一九三一年）、一八頁。
(34) 「中共安溪中心県委関於当前工作的決議」（一九三三年八月二〇日）『福建文件』（各県委文件）、一六五頁。
(35) 「中共上杭県委関於十月分拡大紅軍工作報告」（一九三二年一〇月三〇日）、『福建文件』（各県委文件）、六一頁。「いくらかの政府責任者が土豪の妻をもらった」との指摘もある。「福建省蘇維埃政府関於政治及省蘇工作報告決議」（一九三二年一〇月二〇日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三一年―一九三三年）、三七四頁。
(36) 鄧子恢「竜巌人民革命闘争回憶録」、中共福建省委党史資料徴集編写委員会編『福建党史資料』第二輯、一九八三年七月、二一四頁。
(37) 「閩西蘇維埃政府通告第二号」（一九三〇年九月二二日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、二三六頁。
(38) 「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一一月二九日）『福建文件』（閩西）、二三一頁。
(39) 「中共閩西第一次代表大会」（一九二九年七月）、同右、八六頁。
(40) 「閩西出席全国蘇代会代表的報告」（一九三〇年五月一八日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）一五四頁。

(41) 「閩西的一般政治情形――項英在十二軍警衛連部党団大会的報告」（一九三一年一月一日）、『福建文件』（閩西）、二五六頁。根拠地において、若者たちが女性探しに熱をあげているとする報告はいくつもある。次の中央巡視員の報告は最も極端な例を伝えている。閩南の漳属では、「遊撃隊がもともと七〇余名いたが、省委が破壊された後（一九三一年三月の破壊を指す――引用者）、彼らは非政治的指導を受け、隊長と隊員が女性を見つけて性欲の問題を解決することをスローガンに、皆で手分けして女性を探し、その結果、隊員同士が喧嘩を始め、隊伍の規律は完全に失われ、ほぼ完全に瓦解してしまった」。「中央巡視員巡視福建情況報告」（一九三一年八月三日）、『福建文件』（省委文件一九三一年―一九三四年）、三二〇頁。おそらく、若者たちにとって、悪徳地主を打つことも、宗教施設を破壊することも、異性探しに熱中することも、いずれも「革命」の一部であったのだろう。

(42) 「中共閩西党第二次代表大会日刊」（一九三〇年七月八日―二〇日）、『選編』上、二八三頁、および三〇三頁。

(43) 「中国労農紅軍優待条例についての決議」（一九三一年一一月）、『資料集』第五巻、四八一頁。

(44) 「問題与答解――関於婚姻条例質疑」、『紅色中華』第一一期（一九三二年二月二四日）。

(45) もちろん、寝返りも無視できない問題であった。中共閩粤赣省委は、閩西根拠地内のさまざまな部隊が、「特派員」（おそらく、省委その他から派遣される政治的監視役のことを指していると思われる）を有していないことが、寝返りを助長していると指摘している。「閩西が有する武力については、一二の独立団が特派員を有しているが、その他の各軍、師、団、さらには遊撃隊にはいずれも特派員がいない。そのため、七師団長が寝返り、竜巌遊撃隊長が寝返り、また最近、独立四団に周煥文の団匪が人を派遣してきたため、一群の人々が寝返り、地方武装が退去して逃亡するなどの深刻な現象が起こっている」。「中共閩粤赣省委接受中央局《関於粛反工作検閲決議》」（一九三三年一月一九日）、『選編』下、六六七―六六八頁。

(46) 「福建省蘇維埃政府通令第三十二号」（一九三二年九月一八日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三一年―一九三三年）、三四七頁。

(47) 「福建省蘇維埃政府訓令第七号」（一九三二年五月一九日）、同右、二四七頁。しかも、通行証を、白軍の手先が金で入手することは比較的容易であった。「福建省蘇維埃政府緊急通知」（一九三二年七月五日）、同右、二八一頁。

(48) 毛沢東「才渓郷調査」、『毛沢東集』第四巻、一九八三年、一八四頁に上杭県の例が記されている。

(49) 「福建省蘇維埃政府通令第十五号――対待逃兵的幾項規定」（一九三二年六月二日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三一年―一九三三年）、二五五頁。
(50) 中央ソビエト区中央局「江西およびその近隣諸省における革命の首先的勝利の獲得についての決議」（一九三二年六月一六日）、『資料集』第六巻、四六頁。
(51) 中共ソビエト区中央局「紅軍拡大についての決議――七、八両月の紅軍拡大工作の点検」（一九三二年九月七日）、『資料集』第六巻、九三頁。
(52) 社論「完成拡大紅軍四個月計画動員六千人到紅軍去」、『蘇区工人』第九期（一九三二年一〇月一日）。
(53) 「福建省各県七、八、九、十、四個月拡大紅軍統計表」、『蘇区工人』第一三期（一九三二年一二月五日）。
(54) 亮平「紀念五一論紅軍建設中当前的幾個重要問題」、『闘争』第一〇期（一九三三年五月一日）。
(55) 亮平「在新的形勢下徹底転変福建省蘇的工作（一）」、『紅色中華』第一五七期（一九三四年三月三日）。
(56) 「関於九月間動員三万新戦士上前線的通知」、『紅色中華』第二二九期（一九三四年九月四日）。
(57) 「最後七天内完成三万新戦士上前線」、『紅色中華』第二三九期（一九三四年九月二九日）。
(58) 中華ソビエト共和国臨時中央政府中央執行委員会「紅軍拡大問題についての訓令」（一九三二年九月二〇日）、『資料集』第六巻、一一六頁。党の文書には、遊撃隊や赤衛軍のほかに、保衛隊や政衛隊と称される組織も散見される。だが、これらの組織は、実質的に赤衛軍と変わりなかったものと思われる。
(59) 同右。
(60) 「福建省蘇維埃政府通令第三十二号」（一九三二年九月一八日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三一年―一九三三年）、三四七頁。
(61) 「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一一月二九日）、『福建文件』（閩西）、二〇七―二〇八頁。
(62) 「閩西的一般政治情形――項英在十二軍警衛連部党団大会的報告」（一九三一年一月一日）、同右、二五六頁。
(63) 亮平「在新的形勢下徹底転変福建省蘇的工作（一）」、『紅色中華』第一五七期（一九三四年三月三日）。
(64) 「中共福建臨時省委対福安中心県委的指示」（一九三四年二月三日）、『福建文件』（省委文件一九三一年―一九三四年）、二二四頁。

(65) 「肖××巡視厦門報告」（一九三三年一月二一日）、同右、四一〇頁。
(66) 「福建省委決議」（一九三二年八月一七日）、『選編』下、二一五頁。
(67) 前掲『中国共産党歴史』上巻、二六六－二六七頁。ここでは、土地改革は膨大な数の紅軍予備軍を生み出し、また国共両党の区別を農民に印象づけ、革命に対する支援を引き出す根源となったと主張されている。
(68) 中共ソビエト区中央局「紅軍拡大についての決議」（一九三三年六月六日）、『資料集』第六巻、三〇〇頁。
(69) 子剛「査田運動与検挙運動」、『蘇区工人』第三期（一九三三年六月三〇日）。
(70) この時期の土地改革をめぐる党内の路線対立を、もっとも詳細に跡付けているのは、山本秀夫『中国の農村革命』東洋経済新報社、一九七五年、第三章であろう。他にも、Hsiao Tso-liang, *The Land Revolution in China, 1930-34* (Tokyo: University of Tokyo Press, 1967). および、毛里和子「江西ソビエト期の土地革命」、『アジア研究』第一九巻第四号（一九七三年一月）などがある。
(71) 山本、前掲書、第三章第三節、第四節を参照のこと。
(72) 暴動後の閩西の状況については、羅明が詳細な報告を残している。「羅明関於閩西情況給福建省委的信」（一九二八年一〇月一〇日）、『福建文件』（閩西）、一三－二九頁。
(73) 「閩西工作報告」（一九二九年八月二二日）、同右、一〇三－一〇四頁。もっとも、厳密にいえば、永定県においては、田地の分配は「金豊区、渓南区で分配した以外は、まだ分田に着手したばかりである」（「閩西代表大会主席団向省委報告」（一九二九年七月一三日）、同右、五四頁。
(74) 「福建省蘇第二十四次主席団会議決議案」（一九三二年八月二二日）、『選編』下、二一六頁。
(75) 「福建省蘇報告」、『紅色中華』第四三期（一九三二年一二月五日）。
(76) 中華ソビエト共和国中央人民委員会「訓令第一一号――広く深く査田運動を実行せよ」（一九三三年六月一日）、『資料集』第六巻、二九六頁。少し後で、毛沢東が同じ言明を繰り返している。「査田運動は広大な区域における中心的な重大任務である」（一九三三年六月一八日）、同右、三一六頁。
(77) 「中共福建臨時省委対福安中心県委的指示」（一九三四年二月三日）、『福建文件』（省委文件一九三一年－一九三四年）、二二三－二二四頁。

(78) 「閩西出席全国蘇代会代表的報告」（一九三〇年五月一八日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、一六二頁。

(79) 「巡視員謝運康給中共福建省委的報告」（一九二九年一〇月二五日）、『選編』上、一四九―一五〇頁。この報告によれば、上杭ではかつて一元で一七斤の米を手に入れることができたのが、現在では二七斤手に入れることができる。ソビエト政府が米価の値下げを禁じても、農民はこっそりと値下げして売っているという。これはとりもなおさず、農民が、白軍が来襲して穀物を台無しにされるのを恐れていたためである。

(80) 「閩西特委報告第一号」（一九三〇年一一月二九日）、『福建文件』（閩西）、二一〇―二一一頁。この事実は、竜巌だけが周囲の県と異なり、その大部分で二期作が行われていたことと関係があるかもしれない（同右、二一一頁）。

(81) 同右、二〇六頁。

(82) 同右、二〇〇頁。

(83) 温必権「回憶福建的査田運動」、『風展紅旗』第四輯、福州、福建人民出版社、一九八四年、一三五頁。

(84) 「閩西特委報告第一号」（一九三〇年一一月二九日）、『福建文件』（閩西）、二一七頁および二三二頁。

(85) 温必権、前掲、一四一―一四二頁。

(86) 毛沢東は自らいくつかの村に関する社会調査を行い、報告書をしたためている。もちろん、彼の目的は、これらの村の方式をモデルとして他の地域へ拡大することであった。彼はいう。「長岡、才渓、石水などの郷の方法は、全ソビエトに押し広めるべきである」。「才渓郷調査」（一九三三年一一月）、『毛沢東集』第四巻、一七九頁。

(87) 同右、一八四頁。なお、ここでいう「青年男子」とは一六歳から五五歳までの男子を指している。

(88) 張鼎丞、前掲書、六九頁。

(89) 紅軍兵士の供給実績に関する上杭県と他の県の比較については、例えば、「福建省各県七、八、九、十四個月拡大紅軍統計表」、『蘇区工人』第一三期（一九三二年一二月五日）。

(90) 「上杭群衆慰労紅軍的光栄模範」および「才渓区的慰労熱」、『紅色中華』第九二期（一九三三年七月八日）。

(91) 「中央蘇区上杭県第一期拡大紅軍的総結」（一九三二年一〇月二八日）、『福建文件』（各県委文件）、五四―五五頁。しかも、芦豊郷の多くの党員、および城郊区嫩洋郷の青年団書記は、紅軍への動員を恐れて逃亡したという。「中共

上杭県委関於十月分拡大紅軍工作報告」（一九三二年一〇月三〇日）、同右、六二頁。区によって、紅軍への動員成績に大きなばらつきが生じるのは、長汀県でも同様であった。「中央蘇区長汀県拡大紅軍怪現象」（一九三二年一二月）、同右、六七頁。

(92) 「厳重的上杭的突撃運動」、『紅色中華』第一四六期（一九三四年二月六日）。この報道によれば、一九三三年一二月に党中央の幹部が各県に赴いて指導した「紅軍拡大突撃運動」のなかで、上杭は最も悪い成績しかあげられなかった。結局、この「突撃運動」は「流産」してしまい、福建省ソビエト書記の陳潭秋は解任された。

(93) 「英雄的長汀少模隊全体動員加入紅軍」、『紅色中華』第五四期（一九三三年二月一九日）。

(94) 「『五一』大検閲中各地拡大紅軍的熱潮」、『紅色中華』第一八五期（一九三四年五月七日）。

(95) 興味深いことに、閩西においては、一九三〇年三月に開催された第一回労農兵代表大会が徴兵制の実施を決議した（「閩西第一次工農兵代表大会決議案」（一九三〇年三月二四日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、四〇頁）。おそらく、この決議は、事前に中央ソビエト政府の承認を得たものではなかった。そのため、わずか一ヵ月後に、閩西ソビエト政府は、それを撤回して志願制へと改めたのであった（「閩西蘇維埃政府布告第八号」（一九三〇年四月）、同右、一〇九頁）。この間の経緯は不明である。その後も、志願兵役制から徴兵制への転換が党内で議論されていたことについては、例えば、中華ソビエト共和国臨時中央政府中央執行委員会「紅軍拡大問題についての訓令」（一九三二年九月二〇日）、『資料集』第六巻、一一六頁を参照のこと。

(96) 大衆団体が有名無実であることを指摘する文書は枚挙にいとまがない。例えば、「閩西特委関於組織問題決議案」（一九三〇年八月二五日）、『選編』上、六一七頁は、大衆団体に対する党の指導について次のように述べる。「党フラクションの作用は完全になく、……終始党が一切を「包辦」している」。項英もこう語っている。「例えば、工会、互済会、雇農工会も大衆の組織ではなく、たんに富農を打ち、金を集める機関となっている」（「閩西的一般政治情形」（一九三一年一月一日）、『福建文件』（閩西）、二五五頁）。閩東においても情況は全く同様であった（「中央巡視員巡視福建情況報告」（一九三一年八月三日）、『福建文件』（省委文件一九三一年―一九三四年）、三〇九頁）。

(97) 「中央蘇区上杭県第一期拡大紅軍的総結」（一九三二年一〇月二八日）、『福建文件』（各県委文件）、五六頁。

(98) 「為迅速完成廿四万担穀子而闘争」、『紅色中華』第二一四期（一九三四年七月一四日）。

(99) 「目前党在糧食方面的任務与糧食部的工作」、『紅色中華』第二一八期（一九三四年七月二六日）。
(100) 「中共中央委員会・中央人民委員会関於在今年秋収中借穀六十万担及徴収土地税的決定」、『紅色中華』第二一九期（一九三四年七月二六日）。
(101) 「中華蘇維埃共和国臨時中央政府土地人民委員部訓令第七号」、『紅色中華』第八一期（一九三三年五月二〇日）。
(102) 「中共福建臨時省委対福安中心県委的指示」（一九三四年二月三日）、『福建文件』（省委文件一九三一年―一九三四年）、二三五―二三六頁、および「中共福建臨時省委致福安中心県委信」（一九三四年三月一九日）、同右、二七一―二七二頁。
(103) 「中共閩粤贛省委接受中央局《関於粛反工作検閲決議》決議」（一九三三年一月一九日）、『選編』下、六六六―六六七頁。

結論にかえて――党権力と農民

最後に、以上のような党組織とその動員能力の分析の基礎の上に立って、党権力が農村社会をいかに捉えたか（あるいは逆に、農村によって党権力がいかに捉えられたか）、その過程で何が生じていたか、そしてそこから中国革命の性格について何を新たに語ることが可能となるかを論じておこうと思う。

党は農村社会にいかに張りついたのだろうか。ここで、われわれは党権力とそれを受けとめる側の両方の間での、相互作用の分析を必要としている。免疫学の比喩を用いて、農村で革命勢力に呼応し共鳴する人々（あるいは党権力を内部に引き込もうとする人々）を「受容体」、そして革命勢力を排除しようとする人々を「抗体」と呼んでおこう。筆者のみるところ、この両者を階級的範疇によって同定することは難しい。共産党の想定では、農村における「受容体」は労働者、貧農、雇農であるはずだった。だが、党は彼らが他の階層と比べて、とくに革

命に積極的であると確信することがついにできなかったようにみえる。労働者たち――もちろん、閩西の場合、近代的工場労働者などまず見当たらなかったのだが――は、党が権力を握って労働者の待遇を改善することに成功するや、すっかり満足してしまい、経済闘争を超えて「資本家」に対する政治闘争へと歩を進めようとしなかった。[1] 女工たちも、資本家に対する闘争など夢にも思わず、「正月に三日休みをもらい、二ヵ月分の給料をもらうことなど、気違い沙汰だと思っている」のであった。[2]

貧農が土地の分配を受けると、それで革命が成就したと考える傾向についてはすでに触れた。ある党内文書は、土地の分配を受けた農民が、労働者の賃金が上昇したのをみるや、田地をソビエト政府に返し、労働者となっていると指摘している。[3] かくして、ほとんどの場合、党内文書は大衆を一括し、その革命に対する「右より」の消極的姿勢を批判していたのであった。[4]

流氓と称された人々の革命運動に対する態度はどうであったろうか。ある党内文書は、流氓を匪賊、乞食、阿片窟の経営者、手相見、誘拐屋、道士、ニセ膏薬売り、巫女など三〇もの職種に分類している。[5] これらのさまざまな「職業」に従事する人々が果たしてひとつの階級に属するものとみなしうるかは大いに疑わしいが、彼らが、共産党がある地域を支配するや革命陣営のもとに「投機的に押し寄せる」ことは繰り返し指摘されている。[6] 当初、党はこれらの人々を遊撃隊や農民協会のなかに積極的に抱え込んだ。だが、彼らが党にとって信用ならない人々であることはすぐに明らかとなった。とりわけ、遊撃隊に取り込まれた匪賊が白区に行って行う略奪は、党指導者の目に余るものであった。匪賊に対して、一九三二年夏に閩粤贛省委が示した指示は、もはやその利用可能性など全く論じていなかった。それは協力の対象ではなく、もっぱら打撃の対象であった。[7] 要するに、党が革命を推進するに当たり、持続的で積極的な支持を期待できる階級（あるいはその組み合わせ）など存在しなかったように思われる。だが、そうでありながら、すでに述べたように、さまざまな階級的背景を持つ人々が党組織の「低

い敷居」を軽々と跨いでそのなかに入り込み、いわば階級的雑居状況を作り出していたのである。

一方、革命勢力に対する農村の「抗体」とは、党が土地改革を標榜していた以上、地主と富農となるはずであった。だが、これら農村の上層階層は、村の「体内」に侵入する異物を排除しようと積極的抵抗を試みるよりは、ある場合には逃亡し、別の場合には自ら党内に混入するか、あるいは代理人を送り込み、党の諸政策を内側から操作する道を選んだようにみえる。すでに述べたような党組織の性格からみて、彼らが自ら党の隊列に入り込むことは十分に可能であったし、おそらく政策の操作可能性も小さくはなかったであろう。[8] とすれば、党権力は農村のいかなる階級によっても、積極的に受容されなかったが、かといって積極的に拒否もされなかったのである。農村の住人たちは、異なる階級ごとに党権力と向かい合うというよりは、個別的にそれと向かい合っていたようにみえる。革命根拠地の農村において、革命と反革命という階級的に形成された二つの陣営間のはっきりとした戦線など、見出そうとしても無駄である。だから、中国共産党は外来の権力として、階級連合に支えられる固い殻を持った農村共同体と鋭い緊張関係に立ち、これを力ずくで征圧していったというイメージは当たらないし（この点が、ロシア共産党と農村との悲劇的な関係と大きく異なっているようにみえる）、特定の（諸）階級が階級対立を背景にして、党権力を農村内部に積極的に招き入れたというイメージもまた不適切であるように思われる。農村の住人たちは、階級という集合表象とはあまり関わりなく、個人的・集団的戦略を発動して、「散漫な」党組織を「下から」取り込み、その政策を操作してしまったようにみえるのである。その結果、いわば、ルースな党組織が農村をソフトに制圧したのであった。

党内文書がほとんど唯一その積極性を讃えている人々は、階級的範疇ではなく世代と性別によって定義されている（この両者は、ある部分で重なり合う）。党は独特の青年心理学をもって、青年たち――階級と男女を問わない――に接近したようにみえる。第一回閩西党大会の決議によれば、青年の心理と情緒は成年とは対照的なので

あった。「青年たちは無邪気で、活発で、遊び好きで、しかも何事にも熱烈で断固としており、いささかも躊躇することなく前進する。成年たちとは違うのだ。成年たちには常にうそ偽り、躊躇、冷笑、そして多方面での心配がある」[9]。羅明もまた、永定の農民暴動を観察して、「反動派」に対する態度が、最も妥協に傾く老年、最も戦闘的な態度を示す青年、およびその中間的な態度を取る中年の間で異なっていると記している[10]。

少年たちもまた、きわめて活動的であった。彼らは、青年たちとともに農村の文化変革の先頭に立った。福建省ソビエトの文書は、一九三〇年春に竜巌で生じた過激な文化運動について次のように記録している。「童子団は六歳以上、一六歳以下の男女がみな加入する。……この種の闘争は彼らが自発的にやっている。はじめに一つの村の童子団が会合を開き、その村の祠堂内の神主牌を焼くことを決めた。その村の農民大衆は反対し、家族に号令をかけて、その童子団の領袖を打ち殺し、同時に神主牌を回復しようとした。……のちに全区の少年先鋒隊と童子団に呼びかけ、青年大衆集会を開き、その童子団を支援した。……同時に隊を分けて各村に行かせ、あらゆる神主牌およびすべての偶像を焼き払ってしまった。農民たちは青年たちがかくも熱烈なのをみて、反対しようとしなかった。二日目にこの闘争はさらに拡大し、各区の青年大衆は立ち上がり、全県の位牌、偶像をすべて焼き払ってしまった。……あらゆる結婚、葬式、年中行事、親戚友人づきあいなどに関するよくない風俗をみな廃止してしまった」[11]。ここで示唆されているように、向こう見ずな若者たちの運動は、顎豫皖根拠地の場合と同様、しばしば村落内部に深刻な世代間対立を生み出さずにはおかなかった。共産主義青年団の文書によれば、「青年農民の闘争は、成年の同情を得るところが少なく、そのため、組織的にみて、青年の組織と成年の組織の関係は異常によくない」のであった[12]。

女性たちが、党が掲げる自由な婚姻というスローガンに大いに鼓舞されたことについてはすでに言及した。村によっては、離婚した女性は縛り上げられ、村中を引き回された[13]。それでも、彼女たちは後戻りしようとはしな

かった。とりわけ結婚年齢に当たる比較的若い女性たちは、髪を短く切り、ある場合には金銀の装飾品を捨て去ってさまざまな運動に参加した[14]。ついでにいえば、党が開設した夜間学校で字を学んでいた生徒の大半は女性であった[15]。もっとも、毛沢東によれば、「婆さん」たちの態度はやはり保守的であったが[16]。

だが、たとえ「受容体」が世代、あるいは性別によって定義しうるとしても、前述したモデル地区の検討に基づき、われわれは党に対する支持の限定された性格を強調せざるをえない。青年たちや女性たちの擢る革命の熱病は、空間的にはひとつの区を越えて広がることは難しかったし、時間的には長続きしなかった。しかも、党がどうにか獲得することのできたいわば浮動する支持は、それを党が望んだ方向に誘導することも困難であった。実際、青年たちは熱狂的に暴動に参加しても、紅軍への加入となると及び腰となった[17]。紅軍に加わったとしても、逃亡兵となって村に帰ってくる者が少なくなかった。女性たちはといえば、自由な婚姻を熱狂的に擁護しても、夫が紅軍に加入しないように振る舞いがちであった。

このように、党に対する支持は局所的に熱を帯びるものの、持続性に欠け、そして軌道を与えることが難しかった。さらに、ジェンダー闘争や世代間対立のように、意図せざる副産物を生んだのであった。このことが、党の推進する革命運動の過程に大いなる不確実性を与えないではおかなかった。農村の住人たちは、一九二八年の閩西暴動のなかでそうだったように、ときに党の予測を超えて急進化し、党の制止を振り切って先へ進もうとした[18]。だが、彼らは、紅軍拡大運動に対する対応振りに示されるように、ときに突然立ち止まり、動こうとしなくなったのである。

行動の予測がつきにくいのは農民大衆だけに限らなかった。すでに述べたように、上級機関との交通の貧弱さのために分散孤立しがちな地方党組織は、ときに独自の意図を持って上級機関の政策を過度に推し進め（粛清はその例である）、ときに面従腹背を決め込んだのであった（紅軍拡大、および逃亡兵の処遇をみよ）。もっとも、地

方党機関自体も、その散漫な性格から、大衆どころか党員すら満足に動員できなかったのであったが[19]。こうして、はじめ上海にあり、一九三三年一月に江西省に移ってくる党中央は、組織と運動をつねに「左」の眼差しで眺め、革命のあらゆる要素を自らの厳格な統制のもとに置こうと躍起になっていたにもかかわらず、革命根拠地の現場では混沌が解き放たれていた。党が運動の過程において統御しうる要素はどうみてもごくわずかであった。

われわれは中国共産党の歴史におけるいかなる局面を観察したのだろうか。筆者がかつて顎豫皖根拠地で観察した党組織の諸特徴、党と大衆運動との関係、紅軍からの大量脱走などは、党中央から遠く離れた根拠地に特有の孤立した現象ではなかったことが明らかとなった。同様の現象が、まさに中央根拠地の「首都」である瑞金とは目と鼻の先にある閩西でも起きていたのである。とすれば、中央根拠地から離れた顎豫皖根拠地以外の他の根拠地でも同じ現象が確認されるであろうという予想は十分に成り立つ。筆者は、閩西で確認された党組織とそれが推進した運動の諸特徴が、おそらく中国共産党が築いたすべての革命根拠地の縮図であったと示唆したいのである。

だとすれば、このような混沌とした風景と、一九四九年秋の中国共産党による全国的権力の掌握という誰の目にも明らかな結末とをどのように結びつければよいのだろうか。われわれが中国共産党の組織の「散漫さ」、その動員能力の相対的な低さ、さらには革命過程全般に対する統御能力の低さを強調すればするほど、中国革命史の既定の結末からは遠ざかってゆくようにみえるのだ。このような出発点は、あまりにも到達点にそぐわないのではないだろうか。この小論で展開された議論のどこに、最終的な共産党の勝利を予告するような要因が潜んでいるのだろうか。もしわれわれが共産党の勝利を完全に外部の棚ボタ的要因――国民政府の自滅、および日本軍の侵攻――に依存することなく（もちろん、これも重要だが）、あくまでも党の組織と運動それ自体に注目して説明を組み立てようとするなら、どうすればよいのだろうか。当然のことながら、この問題の検討は、抗日戦争時

期およびそれに続く内戦期の資料の具体的分析に基づいて行われるべきである。だが、一定の見通しを述べておくことは許されるだろう。

もちろん、われわれは、子供の成長になぞらえて、党組織の成長を語ることができるだろう。「幼稚な」党は経験を積み、やがて組織も「固く」なり、それとともに動員能力もまた向上する――このような見通しを描くことは十分に可能である。だが、すでに第二章で述べたように、党組織の「散漫さ」がかなりの程度、歴史的・構造的諸条件を反映していたとすれば、組織がすぐに厳格になることは難しかったと考えざるをえない。また、序論で触れたように、抗日戦争期における共産党の動員能力の限定的性格を強調するいくつかの研究をみても、運動の質的な変化もやはり緩慢にしか進まなかったと考えるべきであろう。もし、党組織の「成長」という要因を排除せずとも、代替的物語の周辺にしか据えることができないとすれば、上記の逆説はどう解くことができるのだろうか。

革命が、革命勢力と政府軍との最終的には軍事力に帰着する力比べである以上、共産党が勝利するためには、国民政府の力を相対的に上回りさえすればよかったという点を想起することは重要である。繰り返すが、「散漫な」組織でも戦えなかったというわけではない。共産党が革命根拠地において、いわば浮動する支持しか得られなかったとしても、国民党の軍隊に善戦することはできたのだった。長続きしない局所的総動員をいくつか積み重ねれば、おそらく戦争遂行に必要な兵員、食糧、金銭などの資源をある程度社会から引き出すことは可能であった（それはモデル地区の構築に積極的に携わった毛沢東の功績に帰すべきかもしれない）。

しかも、党組織が「散漫」であっても、ある条件を満たせば、より広範で継続的な動員は可能になったと思われる。その条件とは、農村の住人に対し、党の支配が永続性を持ちうるとの見通し、および安全保障を与えることであった。実際、農民は党権力の持続性に疑いを抱いていたために、党にすべてを賭けてしまうわけにはいか

なかった。だからこそ、彼らは土地の分配を受けた後も、村々を荒らし回る国民政府軍に穀物を焼かれてしまうのを恐れ、米価の下落を招くことがわかっていたにもかかわらず、それを大量に売りに出したのだった。また、同じ理由から、農民はソビエト政府の制止を振り切って大切な牛を殺したのである。ともかくも革命根拠地における共産党の統治が安定し、安全が保障されていれば、彼らはそうした行動を取らなかったに違いない。それどころか、物理的強制力を背景にした党権力の求めに応じて、穀物を供出せざるをえない人の数は確実に増えたであろう。また、党が作り上げた制度的階梯を利用して社会的上昇を図る者も現れたであろう。その場合、農民の支持に基づいていようといまいと、党の動員能力は向上した可能性があるのである。

ともかくも党権力が農村に腰を下ろしたとき、「散漫な」党組織は、さまざまな階層に属する人々が、さまざまな目的でそれに接近することを許したのであった。それに正面きって抵抗することなどおよそ不可能にみえる権力――農村社会がそれに立ち向かうには超階級的連帯も特定の階級的連帯も欠けていたし、その権力は軍閥や国民政府と比べてさして悪いとは思われなかった――が目の前に存在し、それが予見しうる将来においてそこに居座り続けるという見通しがあり、しかもそれは「下から」操作しやすいとすれば、農民たちがそれぞれの利益の計算に従って、そうした操作を試みないことなどありえようか。したがって、紅軍がともかくも勝利を重ねるか、あるいは何らかの理由で国民政府軍の圧力が著しく緩和されることで（筆者は延安のことを思い浮かべている）、党による安定した支配が実現したところでは、たとえ党組織が「散漫」であり続けたとしても――いや、そうであるがゆえに――党が社会からさまざまな資源を引き出す能力は向上した可能性がある。その場合、党中央の意図とは反対に、農村において、党組織が農民大衆との間に厚い隔壁を設けることなく、いわば薄い浸透膜に覆われた状態であったことが幸いしたのであった。この薄い浸透膜を通じて、さまざまな階級のさまざまな要求や願望が党内に持ち込まれ、それらが「上から」間歇的にやってくる政策に、ときに便乗し、ときにそれを加

工し、ときに換骨奪胎を施しながら、さまざまな程度で実現されるのである。こうして、われわれは「支持」という概念を使用することが不適切に思われる地点まで来てしまった。だが、あらゆる重大な事件の理解がそうであるように、中国で生じた大事件の理解が、ありきたりの概念の適用ですむはずはないのである。

（1）「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一一月二九日）、『福建文件』（閩西）、二〇一頁。この文書によれば、竜巌では一九二九年の暴動後、労働者の賃金は五〇パーセント上昇し、一週間に一度の休みに加えて、床屋代や洗濯代、年末には倍の給料がもらえるようになった。

（2）「中共福州中心市委会議記録」（一九三二年三月二九日）、『福建文件』（補遺）、九九頁。

（3）「中共閩西特委報告第一号」（一九三〇年一一月二九日）、『福建文件』（閩西）、二〇二頁。

（4）消極的姿勢以外にも、大衆の「右より」の諸傾向として、怠惰、享楽主義、悲観主義、恐怖、動揺などが指摘されている（同右、二一四頁）。

（5）「流氓問題――紅四軍前委閩西特委聯席会議決案」（一九三〇年六月）、『選編』中、五一二頁。これら三〇種類の「職業」の多くは、およそ日本語に相当するものが見当たらない。

（6）例えば、「閩西工作報告」（一九二九年八月二二日）、『福建文件』（閩西）、一〇二頁を参照されたい。

（7）「中共閩粤贛蘇区省委関於消滅団匪与土匪問題給各級党部指示信」（一九三二年七月一六日）、『選編』中、六三〇頁。

（8）地主、富農がソビエト機関内に紛れ込んでいるとする報告は枚挙にいとまがない。このような報告を、「左」の眼差しから生まれた現実の歪曲だとみることは可能であるが、報告の数の多さや、党組織の構造的特質などから考えると、ある程度現実を反映したものだと考えたほうがよいであろう。毛沢東はこのような地主、富農がとる戦略を十分に理解していた。そして、おそらくそれが彼に査田運動を決意させた理由であった。彼のみるところ、査田運動における闘争とは、赤旗と白旗との間の公然たる闘争ではない。それは、農村でしっかり根を張ったさまざまな封建的諸関係に基礎を置く、仮面をかぶった反革命勢力との非常に困難な闘いなのである。毛沢東「査田運動は広大な区域

における中心的な重大任務である」（一九三三年六月一八日）、『資料集』第六巻、三一五頁。

(9) 「中共閩西第一次代表大会決議案」（一九二九年七月）、『福建文件』（閩西）、八四頁。同様の評価を行っているものとして、他にも「少年先鋒隊的組織法及其工作」（一九二九年八月四日）、『福建文件』（団組織文件）、一一頁がある。ここでいう青年とは大雑把にいって、一〇代から二〇代までの未婚の男女のことを指していると思われる。

(10) 「羅明関於閩西情況給福建省委的信」（一九二八年一〇月一〇日）、『福建文件』（閩西）、一八頁。

(11) 「閩西出席全国蘇代会代表的報告」（一九三〇年五月一八日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、一五二頁。

(12) 「農村青年工作問題決議案」（一九三〇年一〇月）、『福建文件』（団組織文件）、五三頁。

(13) 「閩西出席全国蘇代会代表的報告」（一九三〇年五月一八日）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、一五三頁。

(14) 「閩西蘇維埃政府布告第三号」（一九三〇年一〇月）、『福建文件』（閩西）、二六二頁。永定県ソビエトの文書によれば、髪を短くしたのは、二五歳以下の女性たちであった。「永定県第二次工農兵代表大会決議案」（一九三〇年二月）、『福建文件』（蘇維埃政府文件一九三〇年）、二七頁。

(15) 前掲『閩西根拠地史』、一九一頁。

(16) 「長岡郷調査」（一九三一年）、『資料集』第六巻、四八一頁。閩粤贛省委の観察も、成年女性と青年女性を比較して、後者は積極的だが、前者は革命に対して特別な思い入れはなく、仕方なくやっている様子だという。「中共閩粤贛省委報告第十四号」（一九三一年八月二〇日）、『閩粤贛』（一九三〇年－一九三一年）、二四八頁。

(17) この暴動のなかで、党は農民の債務に関して、たんに土豪・高利貸しに対する債務を取り消すこと、および一九二七年以前の債務を返済しないことを定めたが、「一般同志は農民意識に支配され、一切の債務を取り消した。……大池、小池などでは、商家の帳簿まで焼いてしまった」。「閩西工作報告」（一九二九年八月二二日）、『福建文件』（閩西）、一〇四頁、および「中共閩西特委報告」（一九二九年八月二八日）、同右、一三〇頁。

(18) 「軍事問題決議」（一九三〇年一〇月）、『福建文件』（団組織文件）、四七頁。

(19) 党中央から派遣された巡視員は、福州の党組織を観察して次のように述べている。「福州には三十数名の同志と

二十数名の団員、および組織された大衆が両区の近くにいるのに、一〇月革命〔記念の〕飛行集会には、たった二十数名の党員、団員、大衆が集まったにすぎなかった。これによって、われわれの行動のための動員は、広範な大衆を動員できないだけでなく、同志までも全体として動員できないことを証明している」。「巡視員鐘維漢巡視福州工作情況報告」（一九三二年一一月九日）、『福建文件』（省委文件一九三一年―一九三四年）、三七〇頁。

〔付記〕本研究は財団法人櫻田會第二二回政治研究助成による補助を受けた。記して感謝したい。